



福澤育林友の会

東京都港区三田2-15-45 慶應義塾 管財部

TEL 03-5427-1050 FAX 03-5427-1190

<http://www.f-ikurin.jp>

福澤先生生誕 175年とこれからの慶應義塾

井田 良

今年2010年は、福澤先生の生誕175年の年です。年頭1月10日の誕生記念会では、ジャーナリストの橋本五郎氏が、福澤思想は「ジャーナリストにとっての羅針盤」であると話されました。先生の思想を生きる指針としているのは、ジャーナリストばかりではないでしょう。汲めど尽きせぬ、深い思想にいつでも立ち戻れる私たちは幸福だと思います。

しかし、私たちは今、福澤先生の時代のそれより、はるかに困難な問題に直面しています。「持続可能性」が問われ、近未来における人類の存続そのものが自明ではなくなっているのです。人口問題、資源問題、核戦争やテロの危険、地球温暖化問題等の環境問題、生命科学の進歩による生命操作の問題、パンデミック等の感染症問題等々、これらは福澤先生の時代にあったいろいろな問題とは次元の違う、より深刻な問題です。

しかも、これらは、世界の国々が一緒に協力しないと解決のできない問題です。福澤先生は、当時の問題を解決するにあたり、先進国である西欧諸国の行き方をお手本にすることができました。これに対し、今の問題は、外国の考え方を取り入れることにより対応できるというようなものではなく、世界の人々とともに、ときには世界の人々を先導して、新たな解決を考案しなければならないという性質の問題です。教育機関としての慶應義塾は、これらの問題に進んで取り組み、解決をもたらすことを可能とする人材を育てるという重い責務を負っています。

さらに、特にわが国の問題として、未曾有の高齢化の問題があります。慶應義塾が創立175年を迎える頃には、人口の30パーセント以上が、創立200年を迎えようとする頃には優に40パーセント以上が65歳以上の高齢者になるといわれます。そこでは、若い世代の一人ひとりがこれまでより多くのものを生み出すことができなければ、社会全体を支えることができません。そのことを可能とするのはやはり教育であり、教育機関がこれまで以上の大きな責任をもつということを意味します。

このようにして、教育機関としての慶應義塾の任務は、これからますます重くなっていくに違いありません。慶應義塾は、このような時代状況を見据えて、教育の内容を再考し、社会のニーズにあったものに変えていくことを求められています。そして、そのとき、教育プログラムの中に環境教育、そして育林教育をしっかりと組み込んだものとするを要請されているのです。そのような教育プログラムの考案と実践にあたり、友の会の会員の皆さまのご教示とご協力を心より願うものであります。





第9回森を愛する会を終えて



平成 22 年の「森を愛する会」講演会は直木賞作家三浦しをんさんをお迎えして開催されました。三浦さんは若者を主人公にした数々の作品を書いておられますが、「神去なあなあ日常」という作品では、都会に住む若者が本人の意思ではなく、なぜか林業に従事することになり、やがて林業の面白さに目覚めるという設定で、林業という職業がわかりやすく描かれています。三浦さんはこの作品を描くにあたられ、実際に尾鷲や松坂などの現場に行かれ、現場の人たちの話を聞き、取材されたそうです。現場の人たちとの交流の中で田舎の生活、林業の面白さを肌で感じ、その時のお話を数々のエピソードを交えてお話ししてくださいました。今回は三浦さんのご希望で対談形式となり、(財)福澤記念育林会理事速水亨がお相手をさせていただきました。三浦さんが見聞きした現場の話と林業従事者としての速水の体験が相まって、会場は笑いに包まれました。なかでも、山火事の話や山の神さまのおこぜ祭りの話などは、都会で暮らす人たちにとってはとても新鮮で興味深く面白かった、と参加者の方から感想をいただきました。



三浦さんはおじい様おばあ様が三重県美杉村に住んでおられ、小さい時からよく訪れていらしたようです。幼いころの自然に包まれた体感がいまでも三浦さんに宿っているかのごとく、ほのぼのとした語り口に、参加者は三田の山で森林浴をしたようなリラックスした気持ちになりました。

講演会後の懇親会でも会員の方にサインをしてくださったり、和やかな歓談のもと楽しいひと時でした。

速水紫乃

平成 22 年度「研修旅行」の案内



今回は、平成 22 年 9 月 11 日(土)、12 日(日)で岩手県盛岡市在住の当地で活躍され、当会員の三田義三様とご子息の三田林太郎様のご紹介で盛岡の伝統工芸や産業、町並みなどの見学を計画しました。



初日は、日本伝統の技が生んだ逸品の南部鉄器の工房見学(鈴木盛久工房)、小岩井農場の家畜排せつ物と町内小中学校、県内食品工場の食品残さを処理して得られるメタンガスを利用したバイオマス発電施設見学、370 年前の土蔵の中で森林総合研究所の柴田銃江氏により「東北の広葉樹の生態について」お話しいただき、夜は、72 カ国を訪問されたという A V A Z のオーナーによる岩手食材の流通のしくみや海外のお話を聞きながらの食事を味わっていただきます。



翌日は、三田農場でりんごの収穫体験、地場材を使った住宅の建築現場を見学したり、クロステラス盛岡にて買い物をして帰宅の途につく行程です。

是非、ご家族やご友人の方をお誘いの上、奮ってご参加ください。皆様方のご参加を心からお待ちしております。



9月11日(土)

- 10:50 集合
- 11:00 鈴木盛久工房 見学
- 11:45 昼食
- 13:30 バイオマスパワー零石 見学
- 15:10 岩手林業(株) 見学
- 17:00 徳清倉庫(株) 見学および講演会
- 19:00 懇親会(食事)

9月12日(日)

- 07:30 朝食
- 08:45 ホテル出発
- 09:00 三田農場 収穫体験
- 11:00 高松の建築現場 見学
- 12:30 昼食
- 買い物
- 14:30 解散

【研究支援の研究報告】

「成熟した自然林は、本当に二酸化炭素を吸収しない？
～遷移にともなう森林生態系の炭素蓄積機能の再評価～」

筑波大学 生命環境科学研究科 廣田 充 氏

皆さんも良くご存じのとおり、森林生態系にはこれらの... 様々な役割があります。

いずれもとても重要な機能ですが、今回は特に、この一番上の炭素蓄積機能について考えてみたいと思います。

森林の炭素蓄積機能について、多くの見積もりがなされてきていますが、大雑把な値としては、陸域にある炭素の6～7割程度が森林生態系に蓄えられていると考えられています。

有機炭素の形で蓄積されているこれらの炭素は将来的には分解されてCO2 となることを考慮すると、森林生態系の炭素蓄積機能を正しく評価することが極めて重要な課題です。したがって、1980年代頃から森林生態系の炭素蓄積機能に関する研究が盛んに行われてきました。その結果、森林生態系の炭素蓄積機能は、環境や場所によって大きく変化することが分かってきました。

そして、その要因として次の3つが重要であることが指摘されています。

一つ目は、森林の成長量や有機物分解に深くかわる温度・水分等の環境条件です。二つ目は、植生の違いです。これは気候による植生帯の違い

などを意味しています。そして、最後は樹齢の違いです。これは、同一樹種の場合にも、また遷移による樹種の入替わりの場合にもあてはまります。いわば森林の成熟度の違いによって、炭素蓄積機能が変化するという事です。これら3つは、個別にはではなく互いに作用しあう要因ですが、近年特に注目されているのは、最後の樹齢あるいは成熟度です。実は、古くから森林は樹齢とともに個体の維持に必要な呼吸量が増加する。そして極相林に達すると、光合成量と呼吸量がつりあり、見かけ上のCO2の取り込みがなくなると考えられていました。つまり成熟するにつれて、森林は、炭素吸収能力を失うということです。

本研究では、2つの目的があると申しましたが、成熟林以外の冷温帯の生態系の炭素蓄積に関する研究は進んでおります。

これまでの調査は、同じく冷温帯に位置する菅平高原にある筑波大学菅平高原実験センターで行って来ました。ここにあるように、このフィールドは複数の遷移段階が隣接する世界的にも珍しいフィールドとなっています。私は、草原から、40年齢アカマツ林、70年齢の針広混交林、そして80～100年齢の広葉樹林の4つの生態系を対象として、炭素循環に関する調査を行いました。

本助成を用いて、冷温帯の極相林とされるブナ林を対象として炭素循環機能を明らかにします。

そして最終的には、これまでの自分の調査結果も用いながら、草原から極相林までの遷移に伴う森林の炭素蓄積機能の変化パターンとそのメカニズムを解明していきたいと考えています。

【活動支援の活動報告】

「北海道奥尻島におけるチシマザサ林床のオクシリエビネの保護と保全について」

北海道大学 大学院農学院 佐藤 広行 氏

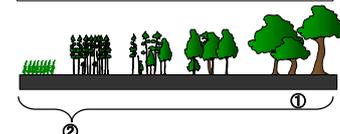
北海道大学の佐藤です。「北海道奥尻島におけるチシマザサ林床のオクシリエビネの保護と保全について」福澤記念育林会より活動支援を頂きましたので、御報告させていただきます。

奥尻島は北海道の日本海側にある島のひとつで、北海道では珍しいブナ林が多く見られる森林を成しています。その林床植物を代表するものとして、チシマザサ等のササ属植物が広く分布しています。このチシマザサ林床のさらに地べたには、ごく稀にオクシリエビネと呼ばれる非常に美しいラン科植物が生育しています。このオクシリエビネは環境省レッドデータブック絶滅危惧Ⅱ類に指定されており、いわゆる絶滅危惧種の一つです。地元の方でも見たことが無いという方が圧倒的に多く、奥尻島の林野庁の

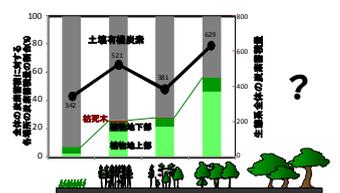


目的 成熟林の炭素蓄積機能を見直す

- ① 数少ない極相林での炭素蓄積機能の定量化
- ② 遷移に着目した森林の炭素蓄積機能の変化パターンとそのメカニズムの解明



今後の予測 遷移に伴って炭素循環はどう変化する？



森林官であった方でも1箇所しか生育場所を知らないという程の稀少な植物です。

この稀少なオクシリエビネを保全するため、活動の前段階として生育環境の実態把握に努めることを目的としました。方法は奥尻島内で生育場所を見つけた15箇所において、5mかける5mの範囲でチシマザサ、所によってはクマイザサを根茎から刈り、チシマザサに覆われて暗くなっている状態から、光環境を改善させました。また、植生調査を行い、どのような植物で構成されている場所に生育するのか調べ、光環境改善後の変化を調べるため、株数と開花している株の数を計測しました。

ところで、オクシリエビネはラン科エビネ属に属する植物で、ナツエビネの変種とされています。北海道の奥尻島と、青森県の一部に生育すると言われています。ナツエビネとの違いは、葉裏に毛があるかないかで識別され、毛がある場合はオクシリエビネとされます。この葉裏の毛というのが非常に微小で、まれに毛を欠くという話が知り合いの中で言われており、オクシリエビネという種が（種ではなく変種ですが）実在するものなのか、念のため標本調査を行いました。

奥尻島内でオクシリエビネを確認出来たのは15箇所、総個体数は548株でした。想像よりも多く生育地を確認することが出来ました。当初チシマザサ林の下で人目につかないようひっそりと生育していると思っていたのですが、予想に反してスギ植林やトドマツ植林地、または人為的かく乱がみられるような2次林においてもオクシリエビネが見られました。このことから、生育環境としてスギ植林地と、ブナ等の広葉樹林に大別することが出来ました。またスギ植林地ではオクシリエビネの規模は大きく、最大で157株確認できたのに対し、広葉樹林では最大で16株と大きな違いが見られました。チシマザサがよく密生する広葉樹林では個体数が少なく、よく手入れされた植林地ではササ類の他、林床植物は草丈が低くなっており、オクシリエビネの個体数が多い傾向が見られました。人の手で管理され林業活動をしているような場所は、チシマザサ等の下層植生を刈り払っているため、光環境が良好で、オクシリエビネにとっては良い環境を維持できていると思われます。このことは、林業活動が図らずもオクシリエビネの保全に役立っていることを示唆しています。

今回の活動でササ刈りを行い光環境も良くしましたが、その影響が直ぐ確認出来る訳ではないので、今後も継続して観察していく必要があります。



お二人から研究や活動に対し支援いただき感謝いたしますとの謝辞をいただきました。研究の発展や自然の保全のために若い人たちの教育、地域の方々の理解・協力に期待しましょう。

平成21年度福澤育林会の収支

会員；243名(内学生・生徒4名)

平成21年度	収入	支出	摘要	
前年度繰越金	882,033			会費の口座振替について 平成22年度会費の口座振替予定日は平成22年9月24日(金)を予定しています。
会費	1,870,000		H21年度会費(206名分)	
〃	50,000		H22年度会費(1名分)	
寄附金	340,273		個人寄附	
利息	381		普通預金利息	
寄附		2,500,000	(財)福澤記念育林会・育林事業への寄附	
通信費		38,000	会費引落案内通信費	
手数料		22,921	会費引落サービス手数料	
当年度収支	2,260,654	2,560,921		
次年度繰越金	581,766			